

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL. 01021)

未来社会をいかに拓くか
— 未来社会を担う新しい人間像を探る —

(思想・文学分野)

菩薩の心

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2015年4月3日開催の第21回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

未来社会をいかに拓くか

— 未来社会を担う新しい人間像を探る —

菩薩の心

東北の大震災から 4 年が経った。震災から私たちは自然の猛威を思い知らされたとともに、これから私たちはどう生きていけばいいのかということが問われている。この問いに答えるべく、キーワードとして「菩薩の心」を取り上げたく思う。

北河原 公敬 (Koukei KITAKAWARA)

1943 年生まれ。華嚴宗大本山東大寺長老、東大寺総合文化センター総長。

国際ロータリー第 2650 地区 2014-15 年度ガバナー、関西ホッケー協会副会長、関西桜友会（学習院同窓会）会長、財団法人大和文華館理事。

著書に、画集『修二会の風景』（版画：浦田周社、文：北河原公敬、有レベル）、『CD ブック ころの法話⑧ 東大寺・北河原公敬』（朝日新聞出版）、『蓮は泥の中で育ちながら泥に染まらない』

（講談社）、DVD『いのちを語る第 10 巻 北河原公敬(東大寺)×さだまさし』（ユーキャン／取扱：大仏奉賛会）などがある。



目次

はじめに

I 時代の変化を知る ～近代の欧米思想の限界

- (1) 東日本大震災で再認識した自然の脅威
- (2) 他との関わりによって、我々は生かされている

II 日本人が失いつつあるもの

- (1) 薄れゆく他者への気持ち
- (2) 「慣性」になって「感性」が薄れる

III 菩薩の心を学ぶ

- (1) 布施行と「無財の七施」
- (2) 他者の幸せを祈る

2015年4月3日開催

第21回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：菩薩の心

講演者：北河原 公敬（華嚴宗大本山東大寺長老、東大寺総合文化センター総長）

（文中敬称略）

はじめに

本講演の話を頂いた際、過去のゲーテの会で話された方々のお名前や演題を見せていただいたが、学者の方や研究者の方等、私の社会からはかけ離れた方ばかりだったので、私は場違いではないかと感じた。しかし、少し変わった話もあった方が良いと思われたのか、是非にと言っていたので、本日、ここに伺わせていただいた。

この会場は壁のほぼ半分がガラス張りであり、このように180度に広がる外の景色を眺めながら話をする機会は滅多にない。建物の中で話をすると、外が見えないことが多いので、このような環境で話をさせていただけるのは、ある意味では有難いと感じている。

この度こちらの所長になられた長尾所長は私と同じロータリアンで、京都東ロータリークラブに所属されていると伺った。私の地区は第2650地区だが、ガバナーを務めているので、京都東クラブにも伺ったことがある。そういう意味では、ご縁のある方がおられるし、その他、存じ上げている方もこの中にはおられるようである。

東大寺は、先月半ばまで修二会(お水取り)の行法があった。近畿では、修二会の行法が終わると「春が来る」と言われており、確かに、すぐに暖かくなり、しばらくして少し冷えたが、その後また非常に暖かい日が続いて、奈良公園は桜が満開である。ところが、本日も含めて天候が思わしくないという長期予報が出ているので、せっかくお越しいただいても、皆さんがお越しになる前に花が散ってしまうのではないかと心配している。来ていただいた方には申し訳ないという思いである。

Ⅰ 時代の変化を知る ～近代の欧米思想の限界

(1) 東日本大震災で再認識した自然の脅威

この会のタイトルがあまりにも大きいので私も戸惑っているが、現在ゲーテの会は「未来社会をいかに拓くかー未来社会を担う新しい人間像を探るー」というタイトルで講演会を開催されている。そこで、私は「菩薩の心」という演題を提示させていただいた。

この演題を選んだ背景には、東日本大震災の経験から生まれたある思いがある。東日本大震災から4年経つが、あとき、私たちはまさに自然の猛威を思い知らされた。異論があるといけませんが、人間が自然を管理し、支配できるという近代西欧、欧米の思想の限界を我々は感じ取ったのではないだろうか。例えば、津波対策として大きな防波堤をつくっていても、

結局、自然の力で潰されてしまった。そういうことを考えると、我々は今、時代が変わったことを認識することが必要なのではないかと思う。

これまでは、科学技術に基づいた暮らしの中で、計算された出来事以上のことは起きないと考えられ、また想定外のことはないも同然という思い込みの中で我々は生きてきたように思う。しかし、これからはそうではなく、自然は常に人間の予測や予想を超えるということを肝に銘じて生きていかなければならない。あの震災で私はそう思ったのである。

東日本大震災が起きたとき、我々は修二会(お水取り)の行法の最中だった。修二会の行法とは、我々が意識する、しないに関わらず、犯した罪や咎、汚れも含めて懺悔し、懺悔した功德で世界の平和や人々の平和、国家の安泰、五穀豊穰、風雨順次などを祈る行法である。これはもちろん行を務めている僧侶だけではなく、我々皆を代表して懺悔してくれる。我々はそれを「悔過(けか)」と言うが、そ



東大寺修二会(お水取り) ignis, CC BY-SA 3.0
<<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>>,
via Wikimedia Commons

の最中にあの大災害が起きたのである。正直なところ、私もテレビであのあり様を見て、まるで映画の世界でしか起こり得ないような状況だと驚いた。その当時、私は東大寺の別当職で自分の執務室にいたが、以前より眩暈がすることがあったので、地震発生時は眩暈がしているのかと思った。しかし、ふと上を見たら電灯が揺れており、「これは地震だ」と確信した。庭の池の水も揺らいでいたので、これほど揺れるということは震源が近いのかと思ったが、何と震源は東北だった。それほど大きな地震だったわけである。いずれにしても、そういう自然の猛威、あるいは人知の予測を超えるような自然に対して、我々はもう少し真摯に向き合っていく必要があると感じた。

同時に、前述したように時代が変わったと感じ、今までのような生き方はできなくなるかもしれないとも考えている。我々はこれまで、好き勝手なことをして生活してきたかもしれないが、欲しいものが手に入る満たされた生活は、将来、難しくなっていくのではないかと考えている。そういうことを考えると、今手に入るものの有難さ、頂けるものの有難み、あるいは授かったものを有難く受け入れる気持ち、頂けることの幸せに思いを致すことが大切ではないか。そういう思いや道徳心を持ちつつ、未来を切り拓く日本人がこれからは必要な時代ではないかと思っている。

(2) 他との関わりによって、我々は生かされている

我々の東大寺は華嚴宗を名乗っており、所依の經典は華嚴經である。華嚴經では、いろいろなものや現象はすべて「個」として孤立しては存在し得ないと説いている。これは時間に

関しても、個々のものに関してもすべて実体的に存在しないと捉えている。あらゆる存在は、他のすべての存在、あるいは全体と限りなく関わり合い、繋がり合い、あるいは作用し合い、働き合い、含み合い、そういう繋がりの中で存在していると説かれている。

この関係性は、我々の生活や社会にも言えることである。例えば、私が自分の親族関係を考えた場合、私という人間が今この世にいるのは両親がいたからであり、その両親はまたその両親がいたから存在し、そうして限りなく家系を遡ることができる。さらに、私というものを中心に横の繋がりを考えれば、親族関係がさらに広がっていく。そうすると、我々は自分が直接知っている人はもちろん、直接知らない人たちとの繋がりによっても、ここに生かされていると考えられる。そのような自分を中心にした無限の広がり、全体の広がり、枝葉の広がりの中で我々は生かされているのである。

一組の男女が出会う場合も同じである。どれだけの人との関りがあって互いに出会う場ができたのか。その関わりを考えると天文学的な数字になると思う。ここにこうして自分が生きて、存在している、生かされているのは、数えきれない膨大な人との関りによるものだと思う。自分の知り得る範囲以外のお陰で、私は生かされているのである。

生かされているのは人間ばかりではない。自然界にも私たちは生かされている。空気や水、太陽の光などの自然の恵みも頂いて我々は生かされているわけである。そういう事実を悟って、認識したとき、我々は他者に対して、感謝の気持ちが湧いて当然ではないかと思う。そのように我々は生かされているのであって、自分一人の力で生きているのではない。そこに他者に対して慮る気持ち、思いを致すような心持ちや、一方で他者の幸せを願う、他者の幸せを喜ぶ、そういう思いも湧いてくるのではないかと思うのである。

ただ、私も含めて人間は煩悩の多い存在であり、欲望の塊であるので、ともすれば、自分さえ良ければ他者はどうでもよいという思いが生じがちでもある。しかしこのように、いろいろな人のお陰で生かされている、あるいはいろいろなものによって我々はここにいるのだと思ったならば、他者に対しても思いやる、あるいは他者に手を差し伸べる、そういう心が大切だろうと思う。

II 日本人が失いつつあるもの

(1) 薄れゆく他者への気持ち

ところが、近年、この心持ちが薄くなっているように感じる。他者を慮る心が少々欠けてきているのではないか。

ただ、東日本大震災や阪神淡路大震災があったときには、見も知らぬ人たち、全く関係のない大勢の人たちが被災者や被災地のために駆けつけて、手を差し伸べ、心を寄り添わせて素晴らしいボランティア活動をされている。私はそのときに、日本人も捨てたものではないと感じた。

つまり、日本人はいざというときは心を寄り添わせるような活動ができるが、平素はそういうところがあまり見受けられない。私よりもっと前の代の日本人には、普段から他者を慮る気持ちがあったものと思われるが、最近はどうも「自分さえ良ければよい」という風潮があるように思う。これはどうしてなのか、私は自分なりに考えてみた。

戦後、日本は目覚ましい発展を遂げ、復興もして、資本主義経済も入ってきた。一方で、それまでと違って「個」というもの、個人の権利に対しての尊重が生じてきた。その結果、近年はその個人の権利ばかりが主張され、他者を慮らない状況になっているのではないかと思われる。自分に災いが降りかからなければ、他者を慮る心が湧いてこないのである。

例えば、以前、私がある人の車に同乗していたときのこと、赤信号で交差点に停まっていたら、対向車線で自転車に乗った年配の女性が同じように横断歩道の手前で自転車を止めようとしてバランスを崩し、倒れてしまった。そのとき、横断歩道が青になったので、2人の人が渡り始めたが、彼らは倒れた女性の前を素通りして行ってしまった。遠目からはその2人が女性に気づいていたかどうかは分からなかったが、続いて来た3人目の青年が倒れた女性に声をかけ、自転車を起こして助けていた。

その様子を見て思ったのは、先に通り過ぎた2人は、女性が倒れたことにもし気がついていて、倒れていた女性が身内や知り合いだったら絶対に助けに行っていたはずである。ところが、自分とは関係ない、助けなくても自分に災いが降りかかるわけでもない相手だから、素通りしたのではないかと思う。もし自分に災いが降りかかるとなれば、絶対に手を差し出したはずである。どうも今の日本人には、そういう判断をしてしまう風潮があるのではないかと感じている。

よくニュースでも、上の階で人が亡くなっても下の階の人は知らなかったとか、普段から顔も合わせないし挨拶もしないから、隣で殺人があっても気がつかなかったとか、そういうコメントをよく聞く。何もお節介を焼けというわけではないが、隣人、他者に対する心配りや思いを致すことが平素からあれば、事態は違ったのではないかと思う。

私のところは子どもたちがすでに外に出てしまい、今は3人暮らしなので、頂きものがあると、食べきれず、家内が隣近所に「宜しかったら召し上がってください」と言って配って歩く。しかし、現在は家の構造や住まいも変わってきたという背景もあって、あまりそういうことが行われていないと思う。昔はそういう他者に対する心配りがところどころに見受けられたと思うが、今は関係のない人のことはどうでもよいという調子になっているような気がしてならない。

(2)「慣性」になって「感性」が薄れる

昔、團伊玖磨という作曲家が「カンセイ」についての話をされた。「カンセイ」は「感性」と「慣性」を意味している。團氏は「今の日本人は『慣性』になってしまい、『感性』が薄れている」と言われた。それは、他者への思いを致すことが薄れていることも原因の一つな



團伊玖磨 (1924-2001)
Unknown author, Public
domain, via Wikimedia
Commons

のではないかと思う。

團氏がそのような話をされるきっかけとなったのが、東京の数寄屋橋のスクランブル交差点での出来事だった。日本で最初のスクランブル交差点が始まったのが数寄屋橋で、それが始まったときに、團氏は偶然居合わせたそうである。それで見ていると、始まったばかりだったからか、警官が拡声器で懸命に「今は赤だから待ってくれ」とか、渡っているおばあさんに「黄色になるから急いでくれ」とか、ひたすらに広報していた。しかも、赤信号で人々がきちんと待っているにも関わらず、のべつ幕なしにがなり立てていた。ところが、そのような中でふと見ると、交番の上に「ただいまの騒音」という掲示板があったということで、團氏は「騒音公害の元は警察だろう」と思ったそうである。

そこで、團氏は当時連載していたアサヒグラフの「パイプのけむり」というページに「我々は大の大人なのだから、そんなにがなり立てなくても2~3回言えば分かる。もしも赤で渡っている人がいたら言えばよいのに、皆がきちんと信号を守っているにも関わらず、のべつ幕なしにがなり立てているので、警察こそ騒音公害の元になっている」と感じたことを書いたそうである。すると、その連載はいつもあまり反応がないのに、そのときだけは警察から反応があり、なんと、後日、團氏が再び数寄屋橋の交差点に行ったところ、警官ががなり立てている様子は変わっていなかったが、交番の上にあった「ただいまの騒音」という掲示板が、「ただいまの不快指数」の掲示に変わっていたそうである。昔は天気予報でも不快指数が出ていたが、それに替わっただけで、実際は何も変わっていなかった。それで、團氏は「他の人たちはこのことを何とも思わないのか」と疑問に思い、日本人は「慣性」になってしまったと言われたのである。つまり、團氏は我慢ならないと感じたのに、一方で、至れり尽くせりの状態に慣れてしまった日本人は、そちらの「感性」が薄れてしまっているということである。

外国に行った際に、私も同様の経験をしたことがある。ドイツで列車に乗ったときの話だが、私はドイツ語も英語も分からないので、チケットを買うときに何番目の駅で降りればよいかと数えていた。ところが、私が乗ったのは鈍行ではなく急行だったため、そのことに気づかなかった私は何番目の駅で降りるかを確認できなかった。そのときは一緒に乗っている人がいたので乗り過ごすことなく助かったが、ドイツの列車は降車駅のアナウンスが一切ないのである。日本であれば、急行でも特急でも「次は〇〇駅までは停まりません」と言ってくれるし、ご丁寧に「右側の扉が開きます」と教えてもくれるが、ドイツはそういうアナウンスが一切ない。それで、日本では電車でうたた寝していても、アナウンスで起きて降りるべき駅で降りる人が結構いるので、そういうアナウンスがないドイツではうっかり降り損なってしまう人も多いのではないかと思い、ドイツの人に聞いてみた。すると、一言「寝

るのはベッドの上で充分だ。なぜ電車の中で寝るのか」と言われた。

つまり、適当にアナウンスしてくれるだろうと思ってはだめだということで、こちらがしっかり意識を働かせておかなければ降りられないのである。ところが、日本は何もかも至れり尽くせりなので、それに慣れてしまった我々はそういう感性が薄れてきている。それが他者に対する思いや心配りも薄れつつある要因の一つになっているのではないかと思う。

そこで私は、他者に対する心配りについて考える中で、「菩薩の心」「菩薩の道」を今一度考えてみる必要があるのではないかと思うに至ったのである。

III 菩薩の心を学ぶ

(1) 布施行と「無財の七施」

菩薩とは「上求菩提・下化衆生」と言われ、上に悟り、真理を求めるとともに、人々も一緒に救済しようとするものであり、したがって、「菩薩の心」とは大いなる慈悲の心とも言える。手を差し伸べる、心を通わせる、寄り添わせる、そういう働きをする。そのために、「菩薩の心」あるいは大いなる慈悲の心を大乘仏教では強調されるが、それを学ぼう、勉強しようと思った場合、仏教では「布施行」を勧められる。

布施と聞いて誰もが身近に感じるのは、寺の方が来てお勤めいただいた際に法礼として出される「お布施」かもしれない。もちろんそういう意味もあるが、この場合の「布施」とは「施し(ほどこし)」のことであり、つまり、「布施行」とは施しの行いのことである。これは、我々のロータリーにおられる千玄室パストガ

バナーがよく言われている。あの方は茶人ではあるが、大徳寺にて得度もされており、仏教にも詳しい。その方がこの布施行を「菩薩の心」を学ぶために特に大切にされている。



伝月光菩薩立像（東大寺）
小川晴暘撮影, Public domain
via Wikimedia Commons

この布施の行いは決して難しいものばかりではなく、誰もが心がけ次第でできる行いがある。これは「無財の七施」と言われる七つの施しで、誰でもできるし、お金も伴わない。そして、「菩薩の心」を学ぶための一つの方法として教えられている。

「無財の七施」の一つ目は「眼施(げんせ)」という眼の施しである。例えば、人と会ったときに睨みつけられると良い気はしない。それで、こちらも睨み返してしまうと険悪な雰囲気になる。しかし、穏やかな眼で相對されると、こちらも穏やかな目で返すし、二人の間は穏やかな関係となる。そういう意味の施しである。

二つ目は「和顔施(わがんせ)」で、にこやかな顔で人と接することである。難しい顔や怖い顔で接していたら相手も怖い顔になってしまう。そういう施しである。

三つ目は「言辞施(ごんじせ)」で、優しい言葉がけである。売り言葉に買い言葉では喧嘩

になってしまうので、温かみのある会話という意味の施しである。

四つ目は「身施(しんせ)」で、相手に迷惑をかけない、相手の見本・手本となるような行いをする事である。

五つ目は「心施(しんせ)」で、正しい清浄な心で生活をする事である。人と接するときも同じである。

六つ目は「床座施(しょうざせ)」で、席を譲る事である。私も少し前に、生まれて初めて電車の中で席を譲られた。人に譲ることは何度もあったが、譲られたのはそのときが初めてだった。その日、私は難波の駅で列の一番前に並んで電車を待っていた。それで、私は難波を始発駅だと勘違いしていたが、今は神戸の方から電車が来るのですでに車内は人が多かった。そういう状況だったので、車内に入ると空いている席を見つけてすぐにそこを目指したが、隣の入り口から入って来た人に席をとられてしまった。仕方がないので出口寄りの方に移動したのだが、すると、近くに座っていた青年が立って「どうぞ」と席を譲ってくれたのである。私は遠慮したが、相手はそれでも「どうぞ」と言ってくれた。私は席を譲ることが何回かあったので経験があるが、せっかく譲ったのに断られたり、たまに怒られたりすることがあり、そうなるそれ以上は何も言えないし、席を立った以上また座るのも座りにくい。それで隣の車両まで移動した経験もある。したがって、ここで私がそれ以上断ると譲ってくれた青年も立つ瀬がないだろうと思い、私は有難く座らせていただいた。これも「床座施」という施しである。

七つ目は「房舎施(ぼうしゃせ)」で、疲れている人がいたら「休んでいきませんか」という、場合によっては「泊まっていきませんか」という施しである。

この七つは、すべて心がけ次第で誰でもできる施しである。つまり、他者に対しての心配り、慮る気持ちで成り立っている。それがこれからの私たちに、もっと必要なことではないかと思う。

(2) 他者の幸せを祈る

もう一つ、辻典子さんというサリドマイド薬害で両手のない女性の話がある。辻さんはそういうハンデがありながらも立派に学校を出られ、社会人になられ、結婚もされた。その方があるとき、自分がそうして来られたのはいろいろな人の支えがあったお陰なので、自分もいろいろな人たちのために何か役に立ちたいと言われた。ある意味で恩返しをしたいということである。

しかし、辻さんは両手がないので、それに対して、他意はなかったのだろうが、マスコミの人が「どうやって恩返しをするのか」と聞いたそうである。すると辻さんは「力のある人は、力をもって人のために役に立つことができる。力のない人は、知恵を働かせて役に立つことができる。知恵のない人は、人を思いやる言葉で役に立つことができる。言葉のない人は、微笑みで人と接し、その人の気分を良くすることができる。微笑みがない人は祈りで役に立つことができる。そして、それは自分にもできる」と言われた。例えば、病気の方に「早

く良くなりますように」と祈ることで心を寄り添わせる、心を致すことができる。そういうことが、これからもう一度私たちには必要なのではないだろうか。

例えば、自分が幸せになることはもちろん大切だが、それだけではなく、同時に他者も幸せになるような考え方、他者を慮る心がこれからの我々の未来を拓く鍵になるのではないか。先の震災以来、私はそう感じている。これは私たち人間ばかりではない。自然界やものに対しても、私たちは慮る気持ちを持つことが大事である。

例えば、今、机として役目を果たしている演卓も、高い所にあるものを取ろうとして適当な台がない場合は踏み台にすることがあるかもしれない。しかし、演卓はそのために世の中に出てきたのではない。もしも物が言葉を話せたら、演卓はきっと「私は脚立ではない。汚い足を乗せるな」と言いたいのではないか。我々はいつそういう扱いをしてしまうが、物に対して思いを致せば、そういうことはできないはずである。その思いが、延いてはものを大切にする、大事に扱うことにつながる。そういうこともこれからは考えていく必要があるのではないかと、私は感じている。

発行日	2023年 3月 15日
講演著者	北河原 公敬
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像
(国際高等研究所庭園)